

大会印象記

原 理 夫

四万十の 川面のせせらぎ 耳にして

神楽に興じる (歌心がないもので、うまい言葉がみつかりません)

鮎の塩焼をほおばりながら、土佐酒をくみかわす。そして、神楽の太鼓の音のリズムにのせられ、なおのこと心地よくなる。能面のため固定したはずの表情が、感情を露にしたのでは、と思えてしまうような舞いには、土地の人の生活感の中における迫力のようなものを感じてしまう。研究対象が「村落」であるだけに、この一夜が脳裏に焼きついて離れないのは私だけだろうか。

大会一日目の夕刻、我々「村研」の面々は、四万十川に面する、高知県十和村広瀬地区にある神社で、地区の人たちから歓待を受けていたときのことである。

私は、二年前の学部時代には、今回の高知大学の学生の方々のように運営のお手伝いをしていたが、「会員」として村研の大会に参加するのは、今回が初めてである。

大会会場は、十和村十川中学校体育館、大野先生率いる高知大学の方々の入念な準備のもとで、大会は予定通りスタートした。大会一日目は自由報告であった。

長谷部会員の「近世後期養蚕地帯の村落構造——福島県伊達郡伏黒村の事例——」。近世期の伏黒村における人口増大の背景として

養蚕業を中心とした商品経済の発展を挙げ、その展開過程における村落構造について検討したものであった。

杉原会員の「沖繩における土地相続・利用調整の慣行の特質——沖繩の家族制農業の推転過程——」。沖繩農業における農民の行動様式の変容過程の解明によって、中間仮説を導いた。この仮説によって、個々の労働力の自立とそれによってその都度家族内部構造が再編成され、内実として家族制度が変容している、とダイナミズムをもってとらえた。「沖繩的変革主体は、風土条件の中にあり、伝統的な社会関係を有効に働かせ、組み替えながら、すでに『そこにあるもの』としての生産関係の不合理性を是正していくことによって『沖繩的中農層』が形成されてきた。」という過程を重視している。

北原会員の「沖繩の家(ヤー)の相続・継承について」。通常、「ヤー」では、家産相続よりも位牌相続の方が重視され、耕地を一族で守ってゆくべき、という意味での家産的観念が弱い。現在は、長子への家督相続にあたる「スーテー・ワタシ」と親の隠居(インチュ)の観念があり、また、「ヤーぬし」権の継承については、祖先祭祀権や、ヤー経営権の継承を重視している。以上のことから、「ヤー」において継承される要素としては「いえ」的要素が少ない、と主張している。

秋津会員の「村落生活におけるネットワークと集団——近江湖北村落にみるツキアイの事例分析——」。村落という集団は、個々の家の私的ツキアイとしての「いえごと」に対して、村落全体に関わるツキアイとしての「むらごと」的部分を分離・明確化している。この「むらごと」的ツキアイを背景として制度化されたシンルイは、本来は、村落生活の枠を前提とする結合契機と機能との折り合いに

影響されるが、近年ではとくに地縁的契機の強まりがみられる、とされている。また、二者関係として対等であるツキアイ関係が、村落全体でみればセットとして差異化されるといえることから、村落の構造を考える場合、個と村落との関係に着目している。

立川会員の「混住化社会における住民社会関係の特質と地域問題への対応」。岡山市・倉敷市・総社市にはさまれる都市近郊農村、山手村日集落をとりあげた。「外からの混住化」(集落内への非農家の新規来住側面)にウェイトを置いて混住化社会をとらえた。現実の新旧住民相互のズレによる地域的葛藤は、単に制度的枠組みが用意されるのみでは解決に至らず、住民社会関係が規定要因となっている、としている。

二日目の課題報告は、「農村社会編成の論理と展開」の共通課題のもと、三氏が報告された。

長谷川会員の「農村社会の方向性と活性化」。現在の日本農村が時代の転換にあり、活力を失って停滞的な状態にあるという状況において、地域社会活性化のための方策を検討しよう、という問題意識のもとに、戦後から現在までの日本の農村の変化を、農業化社会→工業化社会→情報化社会というプロセスとしてとらえた。次に、これらのプロセスに沿って、現在の農村社会が停滞的状况に陥った要因について考察され、①経済の高度成長にともなう地域間格差②農業の技術革新と外国農産物の輸入③国民の生活体系の変化と生活の質の向上④地域的伝統文化の枯渇をとりあげた。これらの問題を解決するために、地域社会変動の方向性として①広域地域社会②地域複合社会③新しいコミュニティをとりあげた。そして、これらの方向性に則って、農村地域社会活性化の方策として①地域社会活性化

化の目標ないし理念の再検討②地域産業の確立③地域基盤・施設・設備の整備充実④新しい人間関係・社会関係の建設⑤传统文化の再生と新しい地域文化の建設を挙げた。

嘉田会員の「環境管理主体としての村落組織とその変容——琵琶湖の村の百年の歴史から——」。琵琶湖岸のある村落の、明治維新以降、現在までの環境管理の歴史を辿りながら、村落における環境管理について、「保全的管理」と「投資的管理」という二つの概念を使い分けて、村落社会に潜む動態的な要素の評価を行うことによつて、水環境保全の役割とその変容について考察している。ここでは、ムラの環境保全の局面として、ムラ人それぞれが受益と支払い能力に依じて納得できる負担（金銭、労働）額を抛出するとともに、ムラ全体としていかに「財産を増やすか」という意図をもつて、積極的な投資的保全も行ってきた、ということを挙げている。そして、村落社会が内面的に問題化しにくい問題を保全する方策としては、ゴミを「ゴミ」と表現する前にゴミでなくなるような、つまり村落生活の内的論理の中で価値あるものとして認識できるように仕掛けが必要である、としている。更に、外的まなざしが村落にもたらされ（知る）、それが内的まなざしとぶつかり、せめぎあいながら特定の行動規範をつくり（選択する）、具体的な行動レベルに発展する、ということに基づいて、村落がもつ主体的側面、地域経営体としての意思をひきだすことができたなら、村領域の環境保全をになう主体として村落は十分その機能を發揮できる、としている。

相川会員の「農村組織の構造と編成論理」。日本の農村社会の中にある主要な三組織、「家」、村落、生産組織がもつ社会構造を、経済面、社会面、意識面からなる、と想定し、社会面、意識面（上部

構造）が経済面（下部構造）から自立した存在であるとし、社会構造の基本原理が人間（社会）関係の中に内在する、とみる。更に、近代社会では、経済と社会とが互いに分離、独立しているという認識の下に、次の観点から農村社会を検討した。

1 社会および意識には、経済とは異なる固有の構造と論理がある。

2 社会関係は相互に限定しあう意味関係として形成されるとき、はじめて持続的たりうる。

3 分離した経済と社会が如何なる関係として社会単位に統合されるのか。その統合の仕方を考察する。

このような視点から、日本農村社会には、市場を介した経済と社会の分離対抗の社会関係と、そこでの商品経済の論理の貫徹、希少な土地資源の占有をベースとした経済と社会の統合の秩序関係と、そこでの組織の論理が存在し、この二つの原理の対抗と調和の中で、農村社会は編成と変遷を繰り返す、と論じた。

このように、質量ともに豊富な報告を二日間にわたって聞かせていただいたが、まだ駆け出しの私には大会期間中にその全てを消化することは困難であった。特に、課題報告後の共同討議においては、司会団の方々の的確なコメントがあったにもかかわらず、議論の全体像を見通すことができず、自分自身が情けなくてやりきれなかった。二年前の学部時代に運営のお手伝いをしていたときと大して変わっていないのでは……とまで思えたほどであった。

司会団の方々のご尽力があったにもかかわらず、交通機関の制約もあって、共同討議の場において退席していかれる方が多かったことも、討議を不活発にしまうことになり、残念な気もした。

討議といっても、時間が限られていたため、質問者からの質問に報告者が答える、といったキャッチボールのようなやりとりが行われ、司会団がコメントを加える、といったものであり、会員相互に、機能的連関のようなものが生じ、議論全体が盛り上がる、といったこともなかったように思えた。

議論の全体像（特に共同討議において）を見通すことができなかった原因としては、もちろん自分自身の力不足、不勉強に帰するところはかなり大きかったと思うが、これらのことも多かれ少なかれ原因として挙げられるのではないか……。

最後になりましたが、大会運営にご尽力頂いた大野先生を始めとする高知大学の方々、（前）事務局の柄澤先生、大会開催にご協力いただいた十和村の方々にお礼申し上げます。

